

アメリカ留学日記（２）

～マイノリティーの立場から得られたもの～

早稲田大学政治経済学部 3年・California Polytechnic State University San Luis Obispo 留学中

服部 祐也

早いもので、私がここ San Luis Obispo で生活を始めてから 5 週間が経ちました。今回は、この 5 週間、私が民族的マイノリティーの立場から学んだこと、考えたことを中心に書かせていただきます。

私にとって、渡米後一週間の心理状況を説明する言葉は、「不安」という二字で十分でした。友達が出来るのかという不安、授業についていけるのかという不安、こんな英語力で生活できるのかという不安、究極的にはこの留学で成果が得られるのかという不安…。そんな私に追い討ちをかけるような状況が待っていたのです。民族的なマイノリティー。そう、ここ San Luis Obispo は、多くの人が抱くだろう California のイメージとは違い、アジア人も黒人もほとんどいない、白人の町なのです。そのような環境で暮らしてきた五週間。アジア人すらマイノリティーであるこの地で、私は思考の転換をすることによって、「オリジナリティーを表現すること」と「常に積極性を持って行動すること」を学びました。また、それと同時に「日本人としてのアイデンティティー」というものを感じてきました。

1、オリジナリティーを表現する強みとしてのマイノリティー

まず、アジア人が少ないこの地で、私はマイノリティーであることに劣等感を抱くのではなく、むしろそれを利用して自分のオリジナリティーを表現できることを実感しました。

San Luis Obispo に到着後、町を歩くと周りには白人の姿しか見えませんでした。私はマイノリティーであることに引け目を感じていました。しかし、授業を翌日に控えた日のことでした。大学生協へ教科書を買に行くと、アルバイトの学生がレジで私

に声をかけてきました。私が日本人であることを話すと、彼女は "What?! Are you Japanese? Oh, cool! Hey, he is Japanese!!" と興奮して喜んでくれたのです。自分はみんなとは違う、というネガティブな気持ちがそれまで根底にあった私にとって、このことはそれまでの思考を 180 度変えた転機でした。自分はマイノリティーで

あるがゆえに、貴重な存在であり、やり方しだいでは注目的になれる。そのように気持ちの切り替えをすることが出来たのです。

マイノリティーゆえのオリジナリティーを表現することで注目的になる、私はそれを International Student Club で実践しました。メンバーの中で唯一のアジア人である私が、西洋人の留学生の前で日本の伝統的な笛、篠笛を披露したのです。それにより、それまで英語が出来ず埋没していた私の存在を彼らに知らせることが出来ました。それ以来、彼らも私によく話しかけてくるようになりました。

2、マイノリティーであることから得られた積極性

次に、マイノリティーであるということから、私は消極的な考えは捨て、自分から積極的にものごとくに挑戦する姿勢を学びました。日本のように、私が黙っていても周りの人が私の考えていることをわかってはくれません。自分から求める姿勢が必要となります。

私は予てより何かの学生団体に所属したいと考えていて、AIESEC という団体に参加することにしました。しかし、前日になり、にわかにな消極的な気分になりました。自分以外は皆アメリカ人。こんな英語力ではみんな相手にしてくれないのではなかろうか。しっかり受け入れてくれるのだろうか。いっそのこと、行くのを辞めてしまおうか…。しかし、ここでも思考の転換をすることによって気が

ちがガラッと変わりました。いわゆるひらきなおりで、「現場を想定して英語のイメージトレーニングをすることは大事。でも、不安という気持ちは何の役に立たないし、そうなったところで、英語力にしる、周りの態度にしる、何ひとつ変わらない。むしろ不安になることで自分が疲れるし、英語のパフォーマンスも悪く



International Student Clubのハイキング
山の頂上で30人くらいの留学生を前に演奏